

SHOW HEYシネマルーム

★★★★



Data

監督・脚本：ダニエル・トンプソン
出演：ジャン・レノ/ジュリエット・ピノシュ

👁️👁️ みどころ

主人公は恋人から逃げる女と恋人を追いかける男。こんな二人が悪天候のため足止めを食ったパリのシャルル・ド・ゴール空港でみせる男女の愛の機微。何ともおシャレなフランス版ロマンティック・コメディだ。邦題は原題とは全く違うが、実にうまくつけたもの。その意味は映画を観ればよくわかる……。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<フランス版ロマンティック・コメディ>

この映画を監督したダニエル・トンプソンは30年以上のキャリアを持つ女性脚本家。だから本作は自ら書いた脚本を映画化したものだ。もっとも、その脚本は10年前に書かれたもの。フランス人女性とアメリカ人男性がパリのド・ゴール空港で出会うストーリーで、アメリカ映画の予定だったが、映画の舞台が一ヶ所に限定されることが嫌われて、「ボツ」になったとのこと。

トンプソンがこの映画を監督するについては、主人公の男性をフランス人に設定変更したのをはじめとして、いくつかの状況設定を変更し、現代版、フランス版のロマンティック・コメディに仕立て上げた。

登場人物は、事実上2人の主人公のみ。舞台も基本的にはシャルル・ド・ゴール空港のみ。上映時間も1時間26分とシンプル。フランス語が分かれば、2人が話す「大人の会話」の「妙」がもっと理解できていいのだが、それは映画の鑑賞後、パンフレットの解説での補習勉強に頼らざるを得ない……。

<2人の男女の対比が絶妙>

女性ローズ（ジュリエット・ピノシュ）はメイキャップ・アーティスト。12年間付き

合ってきた恋人と別れて精算し、今は1人、新天地アカプルコのホテルでのエステシャンという仕事に向かうため、今空港の中だ。職業柄か、衣裳も派手、化粧も派手。

しかし、こんなローズがホテルの一室で「素顔」を見せると・・・。

ローズを演ずるジュリエット・ピノシュは、1997年の『イングリッシュ・ペイシェント』の看護婦役で、アカデミー助演女優賞、ベルリン映画祭銀熊賞（主演女優賞）を受賞し、最近では、『ショコラ』（2000年）でアカデミー賞主演女優賞にノミネートされ、ヨーロッパ映画賞観客選出主演女優賞を受賞した、ちょっと「オバさん」だが、魅力的な女優。

男性フェリックス（ジャン・レノ）は、アメリカにフランス料理店を出して、大成功しているフランス人。父親もフランスでレストランを営む料理人だが、父親への反発、フランスへの反発からアメリカに渡り、ちゃっかりと、フランス料理とフランス人であることの価値だけは活用している。しかし性格は不器用だし、アメリカで生活しているためフランス語の言葉づかいはかなりデタラメ。そして最近の言葉を知らない。

だから、ローズとの会話においても、随所にその「ズレ」が現れる。もっとも、その「ズレ」がまた次の会話を生み、お互いの興味が深まるという面白い現象になるのだが・・・。

フェリックスは、自分から逃げようとしている恋人を諦め切れず、未練タラタラ。

ド・ゴール空港の中、盛んに携帯で、(元)彼女と連絡をとり、ご機嫌とりをしているが・・・。

＜舞台はド・ゴール空港、小道具はケイタイ＞

この何の関係もない2人の男女を偶然引き合わせるようになったのは、パリのシャルル・ド・ゴール空港。

悪天候、ストライキ、コンピューターの故障・・・。「本当にフランス人、フランスという国は当てにならない・・・」。これはフェリックスのセリフだが、一般的イメージではその通りだ。このため、すべての飛行機が足止めを食らい、空港は大混乱。

こんな時に威力を発揮するのが携帯電話。

ローズも携帯で忙しく家族へ状況を報告し、指示を出していたが、何ということだ。トイレの中にその携帯を流してしまった。英語で言えば「OH, MY GOD!」・・・。

フランス料理店で大成功しているフェリックスも、こんなところで足止め食らっては、仕事上に大きな支障が・・・。そこで空港内を移動しながら携帯がフル稼働。料理の指示からコマースの指示まで、大忙しだ。

自分の携帯を失ったローズは、動く歩道の中、忙しそうに携帯をかけているフェリックスを見て、「すみません、ちょっと携帯を拝借・・・」ときた。そしてこれが「新しい世界」へのすべての出発点だった。なるほど、うまく脚本を書くものだと感心・・・。

＜男女の機微はお手のもの＞

フランス映画には、男女の機微をうまく描いた名作が多い。これは多分フランス人は、「恋愛好き」が多いからだろう。

恋人にきっぱりと別れを告げて、人生の再出発をしようとしている女性ローズと、未練タラタラの恋人に逃げられてしまった男性フェリックスとの間に、どんな状況の中で、どんな恋が生まれるのか・・・？それを、甘く切なくそして楽しくロマンティックに描くのがロマンティック・コメディの神髄。

このフランス版、ロマンティック・コメディは、「フランス語の理解」という多少高いハードルがあるものの、十分その神髄を楽しむことができる。

この映画ではローズの職業をエステシヤン、メイキャップ・アーティストと設定したため、「化粧」のウェイトが高い。男の私には分からないが、映画の中でもそのシーンはかなり多い。それにしても「女は化けるもの」、とあらためて実感させられるが、ホテルの部屋の中、化粧を取り素顔で洗面室から出てきたローズをはじめ見た時のフェリックスの顔が印象的。「素顔がいいよ」とまでは言わなくても、大抵の男は「厚化粧は苦手」なはずだ。

それにしても、今流行の、「電車の中での化粧」だけはやめてほしい。

<原題と邦題の機微>

この映画の原題は、フランス語の「Decalage horaire」(デカラージュ・オレール)。パンフレットによると、これは「ズレ」とか「時差」という意味らしい。

パンフレットの中では、フランス文学の窪川英水都立大学名誉教授が、「彼の中の時差―浦島太郎／フェリックス」というタイトルで、フランス語のうんちくを傾けた面白い解説を加えているので、是非これを読んでもらいたい。

これに対して邦題は、『シェフと素顔と、おいしい時間』。原題をそのままカタカナで邦題とする傾向が強い今、これは最近数少ないシャレた邦題だ。このタイトルをみただけで、何となく映画のイメージが伝わってくる感じ。そして映画を観れば、このタイトルが実にハマっていることがよく分かる。すばらしい邦題をつけたものだと感心。

2003(平成15)年10月6日記